

「黄金のバンタム」を破った男

百田尚樹



PHP
文芸文庫

○ 本表紙デザイン＋ロゴ
川上成夫

「黄金のバンタム」を破った男◎目次

第一章 日本ボクシングの夜明け

7

第二章 ホープたちの季節

41

第三章 切り札の決断

75

第四章 スーパースター

109

第五章 フライ級三羽烏

141

第六章 黄金のバンタム 177

第七章 マルスが去った 209

第八章 チャンピオンの苦しみ 247

第九章 「十年」という覚悟 281

解説 増田俊也 322

〈装丁写真説明〉

一九六五年五月十八日、愛知県体育館にて世界バンタム級タイトルマッチが行なわれた。第四ラウンド、王者エデル・ジョフレ（左・ブラジル）に右アッパーをヒットさせるファイティング原田。

「ヨシオ、君はこの試合に勝利することで、
敗戦で失われた日本人の自信と気力を呼び戻すのだ」

(カーン)

第一章

日本ボクシングの夜明け

忘れられない光景がある。

テレビの前で父と父の友人がわけのわからない声を上げている。ふだんは物静かな二人が怒鳴り声を上げている。異様に興奮した二人の様子が怖かった。白黒テレビの画面で繰り返し広げられているのはボクシングの試合だった。

テレビが我が家に来たのは私が小学校一年生の時だから、昭和三十七年（一九六二）だ。そのテレビは父が友人に作ってもらったものだった。その頃、テレビは恐ろしく高くて、貧乏な我が家にはとても買えるものではなかった。父の友人は電器店に勤めていて、ブラウン管と真空管などを組み合わせてテレビを組み立ててくれたのだ。当時はブラウン管を単品で売っていたのだろうか。それにしてもキャビネットはどうしたのだろうか。よく覚えていないが、手作りの箱ではなかった。もしかしたらその頃は新品のテレビを買えない人のために、組み立て用のテレビキットのようなものがあつたのかもしれない。あるいは中古のキャビネットを再利用したのだろうか。父も友人も亡くなった今はたしかめるすべがない。

父と友人が熱狂して見ていたのは、ボクシングの試合だった。

世界フライ級タイトルマッチ、ポーン・キングピッチ対ファイティング原田の試合は、我が家にテレビが来てまもなくのことだったと記憶している。今、本で調べると、この試合は昭和三十七年十月十日に東京の蔵前国技館で行われている。奇し

くも二年後の同じ日に東京オリンピックが開会している。ちなみに「体育の日」という祝日は東京オリンピックの開会式にちなんでできた祝日で、長い間、十月十日だった。今でも私たち古い世代の間は十月十日は休日というイメージがある。

試合が始まると、父と友人は何度も大きな声を上げた。ふだんは大きな声なんか滅多に出さない二人のそんな様子が驚きだった。

最初は興味のなかった私もいつしか夢中になって見ていたように思う。しかしどちらが原田なのかわからない。父に聞くと「白いパンツが原田だ」と言った。それで試合中はずっとパンツばかり見ていた。

試合は突然終わったような印象を受けた。白いパンツの男が黒いパンツの男を端っこに追い詰め、めちやくちやに殴りまくると、黒パンツがずるずると座り込んだのだ。

「やった！」

父と友人はものすごい大きな声を出した。私は黒パンツが座り込んだことよりも二人の大声にびっくりした。

「世界チャンピオンや！」

父と友人は何度もその言葉を口にしていった。小学校一年生の私にとって、「世界チャンピオン」の意味も価値もよくわからない。ただ日本人が「世界一」になった

のだなということだけはわかった。

今なら、それがどれほどすごいことだったのかわかる。当時の新聞を読み直すと、日本中がこの勝利に熱狂した様子が見て取れる。原田の世界タイトル奪取は本当に大変なことだったのだ。

ボクシングファンなら誰でも知っていることだが、現在と昔ではボクシングの世界チャンピオンの価値がまったく違う。

当時のチャンピオンは世界にわずか八人しかいなかった。つまり八つの階級に、それぞれ一人ずつ王者が君臨していたのだ。ちなみに現在は十七階級、しかもチャンピオン認定団体も増えて、WBA、WBC、IBF、WBOの主要四団体がそれぞれチャンピオンを認めていて、その総計は七十人ほどにもなる。中には複数の団体に認められた統一チャンピオンもいるが、一方で暫定ざんていチャンピオンやスーパーチャンピオンという存在もあって、わけがわからない。とにかく世界チャンピオンが七十人もいるなんて、どこが世界チャンピオンなのだ！ と言いたくなるが、それはともかく昭和三十七年当時の世界チャンピオンというのは現代とは比べものにならないほどの重みと価値があった。

しかし当時の日本人を熱狂させたのは単に原田がチャンピオンになったからだけではない。このタイトルを奪い返すことが多くの日本人ファンの悲願だったから

だ。皆がこの日を長い間待ち望んでいたのだ。昭和二十九年（一九五四）に日本人初の世界チャンピオンであった白井義男がタイトルを失ってから、八年の歳月が流れていた。

昭和二十七年（一九五二）、白井義男がこのタイトルを獲得した時、日本人は敗戦によって失われていた自信と誇りを取り戻した。白井こそは日本人の希望の星であり、そのタイトルは一人白井だけのものではなく、日本人が自分たちのタイトルだと思っていた。この当時の日本人にとって「世界フライ級チャンピオン」というタイトルは、単なる一スポーツのタイトルではなかった。日本人が世界に胸を張って誇れる「偉大な何か」だったのだ。二年後、白井がタイトルを失うと、多くの日本人がそれを自らの悲しみとした。

以来、このタイトルの奪回は、国民の悲願となった。多くの才能ある日本人ボクサーがその期待を背負って、世界タイトルに挑み続けたが、誰もそれを奪うことはできなかった。何と八年もの長き時間にわたって、「世界」は彼らを跳ね返し続けてきた。日本人はあらためてその壁の巨大さを知った。そしてあらためて白井の凄さを知った。もはや第二の白井は出ないのか——そんな諦めにも似た思いが覆いか

けた時、突如、十九歳の若武者が現れ、「世界」を奪回したのだ。
ファイティング原田こと原田政彦は一夜にしてスーパースターとなった。

* * *

ここで原田の物語に入る前に、時代を大きくさかのぼって、白井義男について語りたいと思う。原田を、そして日本のボクシング界を語るには、白井義男は絶対に避けて通れないからだ。白井がいなければ、日本のボクシング界の発展はなく、その後の多くの日本人世界チャンピオンの存在もなかっただろう。

白井義男は大正十二年（一九二三）に東京で生まれた。白井がボクシングに興味を持ったきっかけは面白い。小学生の時、夜店のカンガルーボクシングでカンガルーと対決したことで、拳闘に対する関心を持ったのだという。

戦争中の昭和十八年（一九四三）、二十歳の時に拳闘ジムに入門、ジムに入った二週間後にデビュー戦を戦っている。戦時下で有望選手が徴兵に取られたりして選手がいなかったための緊急処置だったのだろう。驚いたことに、白井は入門二週間の素人同然で中堅どころの相手選手を一ラウンドでKOしている。この年、奇しくも同じ東京で後に白井に次いで日本で二番目の世界チャンピオンになる原田政彦が誕生している。

白井はこの年から翌年にかけて六戦して全勝5KOという素晴らしい成績を残している（この時代の成績は不明なものも多く、一部には八戦全勝6KOという情報もある）。

白井は才能溢れるボクサーだった。多くのボクシング関係者に注目され、いずれは日本チャンピオンを狙える逸材だといわれた。

しかし時代が白井の未来を奪った。白井がデビューした昭和十八年、日本はガダルカナル島をめぐる戦いに敗れ、戦局がにわかには厳しいものになっていった。更には翌年には乾坤一擲の勝負を懸けたマリアナ沖海戦で大敗北を喫し、その年の暮れにはフィリピンでカミカゼ特別攻撃が行われた。

もうのんびりボクシングをしている時代ではなかった。その年にはすべてのボクシング興行が禁止された。白井も軍隊に入り、千葉県の香取航空基地で飛行機整備兵となる。やがて次の任地が硫黄島に決まるが、大型の輸送機が用意できず、白井の硫黄島行きはなくなる。この時、白井が硫黄島に向かっていたら、戦後のボクシング界の歴史は大きく変わっていただろう。白井はその後、各地の航空隊を転々とし、最後は青森県の三沢航空隊で終戦を迎えた。

復員して東京に戻ると、家は空襲でなくなっていた。白井は生きるために様々な仕事をしながら、やがて再びボクシングの練習を開始する。

当時はジムも練習場もなかったが、ボクシングに魅^みせられた男たちが青空の下で、トレーニングを開始したのだ。食べるものも住む家もないが、好きだけボクシングができる喜びを胸に、多くのボクサーが懸命に練習^{はげ}に励んだ。戦争中は敵性語として禁止されていたストリート（直打）、フック（鉤打）、ダウン（被倒）などの言葉も復活した。しかし白井は過酷な軍隊生活で座骨神経痛を患^{わずら}っていた。

昭和二十一年（一九四六）、白井は二年ぶりにリングに上がったが、無惨なKO負けを喫する。腰の故障で本来のボクシングができなくなっていたのだ。その後も調子は上向かず、勝ったり負けたりを繰り返した。戦前は将来を嘱望^{しよくほう}されていた白井だったが、戦後はすっかり並の選手になっていた。かつて夢見ていた日本チャンピオンはもはや手の届かないものになっていた。

昭和二十三年（一九四八）、二十五歳になっていた白井は、自らの限界を感じ、引退を考え始めていた。もし、この時、一人のアメリカ人が白井の姿を目にとめることがなければ、彼の人生は平凡なままに終わっていたかもしれない。

そのアメリカ人は「ドク・カーン（カーン博士）」と呼ばれていたアルビン・ロバート・カーン博士、当時GHQ（進駐軍）の将校だった。彼はイリノイ大学で生物学と栄養学の教授を務めた後、GHQの天然資源局で日本人の食糧支援のために日本の周辺海域で採れる海洋生物の調査を行っていた。この時、五十六歳だった。カー

ン博士は趣味の貝殻取拾のために築地の魚市場に通っている時、その通り道にあった日拳ジムを目にし、見学に立ち寄った際に練習中の白井を見つけたのだ。

カーン博士のもう一つの趣味がボクシングだった。彼自身はボクシング経験はなかったが、運動生理学を専門とする立場からボクサーの筋肉の動きに興味を持ったのがきっかけで熱烈なボクシングファンになっていた。

そんなカーン博士が日拳ジムで練習していた白井に注目した。この時、博士がジムのトレーナーや練習生に尋ねた有名な言葉がある。彼は白井を指さしてこう聞いたのだ。

「あれはチャンピオンか？」

聞かれたトレーナーたちは笑った。白井はチャンピオンでも何でもなく、鳴かず飛ばずのボクサーで、しかもまもなく引退しようとしている選手だったからだ。しかし本場アメリカで数多くのボクシングを見続けていたカーン博士の目には、白井が素晴らしい素質の持ち主に見えた。

カーンがジムのトレーナーに「シライをコーチしてもいいか」と聞くと、トレーナーは「白井さえよければ」と答えた。カーンはいつもぼろぼろのコートを着ていて、トレーナーたちには、変わり者のボクシングマニアにしか見えなかった。もう半ば終わってしまったようなオートトルボクサーの白井を、物好きなアメリカ人に渡

すくらしい何でもなかったのだ。

カーンに「君をコーチしたい」と言われた白井は驚いたが、藁わらにもすがる気持ちで「お願いします」と言った。この出会いが日本のボクシング界を大きく変えた。

カーンは生活面と経済面の面倒を見ることを条件に白井と専属契約を結ぶ。そして白井を自分のボクシング理論通りに育て上げることを試みた。

彼はまず白井に徹底的に防御の大切さを教え込んだ。それまでの日本のボクシングは肉を切らせて骨を断つという「肉弾戦」スタイルが主流で、防御は卑怯ひきょう者のするものという見方があった。戦前の軍国主義と相まって、パンチを受けることを恐れず、玉碎たまくだ戦法のような勇敢な戦いぶりが大いに好まれていたのだ。その典型的なスターが白井の十歳年長のピストン堀口だった。堀口はどれだけ打たれても前進を止めず、最後は相手を強烈なパンチでリングに沈めた。「拳聖けんせい」と呼ばれたほどの伝説的なボクサーで、生涯成績一八四戦一四三勝（88KO）二六敗一五分けという成績は日本人ボクサーとしては空前絶後の記録である（この時代の記録は正確ではなく、諸説ある）。負けのほとんどは晩年のもので、若い頃はまさに無敵と呼ぶにふさわしく、デビューから四九連勝という記録も持っている。堀口以降の多くのボクサーも堀口のスタイルを真似まねた。

しかしカーンの持論は「ボクシングとは、相手に打たせず、自分が打つ」ものだった。堀口のように「肉を切らせて骨を断つ」ボクシングはカーンの辞書にはないものだった。

またカーンは白井にパンチの打ち抜き（フォロースルー）の大切さも徹底的に叩き込んだ。それまで日本のボクシング界のストレートの打ち方は、空手の突きのように、打ち終わった時点で拳を止めるというスタイルが正しいとされていた。打ち終わった後に拳を前へやるのは「押す」ようなもので、意味がないとされていたのだ。しかしカーンはパンチは標的を突き抜くように打たなければならないと教えた。

カーンの本場仕込みのボクシングを吸収して、白井は甦よみがえった。スピードとフットワークを生かし、防御を重んじ、フォロースルーを効かせたパンチは、対戦相手を寄せ付けなかった。

白井の「打たせずに打つ」という戦いぶりは当時の多くの観客に「卑怯な戦法」「臆病おくびょうな戦法」とののしられたが、カーン博士は「ボクシングはショーではない。スポーツなのだ」と言い、白井に派手な打ち合いをさせなかった。

カーンは白井の健康管理にも気をつかった。彼のためにいつも最高級の食事を用意した。多くの日本人が毎日の米にも事欠く時代に血の滴したたるようなステーキなど栄

養たつぷりの食材をふんだんに食べさせた。過酷な軍隊生活と戦後の厳しい食糧事情で栄養不良となり、座骨神経痛に苦しめられていた白井は次第に体調を回復させていった。

白井はカーンの指導のもと、次々と強豪選手を破り、ついに昭和二十四年（一九四九）一月に日本フライ級王座に挑戦した。チャンピオンの花田陽一郎は戦前からフライ級の王座を保持（途中、チャンピオン制度のない空白期間あり）していた強豪だったが、白井は彼を五ラウンドKOで破り、念願だったタイトルを獲得した。

しかしカーン博士は更に白井の実力をためすように、その年の十二月、一階級上のバンタム級（現在は、この間にスーパーフライ級があり、二階級上になる）王座に挑戦させる。

この時のバンタム級チャンピオンはピストン堀口の実弟である堀口宏で、兄譲りの猛烈なファイターで無敵のチャンピオンだった。この試合は「世紀の一戦」と呼ばれ、芝のスポーツセンターには一万五千人の観客が集まった。会場に入りきらない三千人の人が木戸を壊すという事件まで起こったほど注目を集めた試合だった。なお、この試合は戦後NHKラジオが初めて実況中継した試合で、全国のファンが固唾を呑んで中継に耳を傾けた。

白井はカーン直伝（じきでん）のフットワークを駆使（くし）した科学的なボクシングで堀口を寄せ付

けず、見事バンタム級の王座も獲得した。シカゴの大富豪の御曹司であるカーンはこの勝利を祝福し、白井のために北区に三百坪の土地を買い、家を建ててプレゼントした。

白井はカーン博士と自分の幸運に感謝した。腰痛持ちで引退寸前だった自分が二階級制覇のチャンピオンになったばかりか、家まで手に入れることができたのだ。

しかしカーンの目標はもっと大きかった。彼は白井を世界チャンピオンにしようという考えを持っていたのだ。しかし当時の日本ボクシング界にとって世界チャンピオンというのははるか雲の上の存在だった。白井自身、自分が世界チャンピオンになれるかもしれないなどは夢にも思わなかった。当時、日本のボクシング界から見た世界のレベルは大人と子供くらい違うといわれていた。

しかしカーンには勝算があった。自分が育て上げたヨシオは世界に通用するボクサーだという信念があった。

そして当時、世界フライ級チャンピオン、ダド・マリノを擁していたプロモーターのサム一ノ瀬に「チャンスをくれないか」と手紙を書いた。そして一ノ瀬がいるハワイまで出向き、「日本に錦を飾らないか」と口説いている。

サム一ノ瀬は一九〇七年（明治四十）マウイ島生まれの日系二世である。アメリカ

カ人だからサム・イチノセと表記すべきだろうが、多くの書物で「一ノ瀬」と書かれてあるので、ここではそれに倣うことにする。一ノ瀬の両親は一八九九年（明治三十二）に九州からハワイに移民した。夢を抱いてハワイにわたったものの、劣悪なサトウキビ農場で農奴のうどのように働かされた。一ノ瀬は「パパもママも奴隷どれいのようだった」と語っている。十人兄弟の五番目に生まれたサムは貧困のため高校を中退して働いている。その後、様々な職を転々とし、ボクシングジムを作った。そこに入門してきた初めての練習生がフィリピン系移民二世のダド・マリノだった。

マリノは素晴らしい才能の持ち主でめきめき実力を上げ、世界チャンピオンも狙えるほどの選手になった。しかし時代が悪かった。世界ランキングにも入り、いよいよ全盛時代を迎えるという時に第二次大戦が始まったのだ。マリノは海兵隊に召集され、太平洋で日本軍と戦った。戦争が終わった頃、マリノは若さを失っていた。

その後、一ノ瀬とマリノは世界タイトルを追いかけるが、チャンピオンに逃げられたり、あからさまな地元判定で勝っている試合を負けにされたり、実力がありながら王座決定戦から外されるなど、多くの悲運に泣かされた。ちなみにサム一ノ瀬は「サッド・サム」という綽名あだなで呼ばれているが、その名前の由来は「悲しげな顔」をしているからという説と、マリノをめぐる不運がつきまತ್ತたからという二

つの説がある。

しかし一ノ瀬とマリノは諦めず、一九五〇年（昭和二十五）、ついに地元ハワイでのフライ級チャンピオン、テリー・アレン（英）に挑戦する機会を得た。そしてアレンを判定で破り、悲願だった世界タイトルを掴んだ。しかしこの時すでにマリノは三十四歳になっていた。

カーンの説得を受けた一ノ瀬は、マリノを連れて父母の国に行くことを決め、ダド・マリノと白井のノンタイトルマッチを了承する。彼は同胞にチャンスをやりたいと考えたのだ。一ノ瀬はアメリカ人でありながら日本人の心を持ったサムライだった。

昭和二十六年（一九五二）、一ノ瀬はマリノとともに来日した。日本人のほとんどが生まれて初めて目にする世界チャンピオンだった。この時、戦前から日本のボクシングの発展に尽力し、ボクシング評論家として名高い郡司信夫は「自分が生きていけるうちに世界チャンピオンが見られるとは思っていなかった」と語った。

この時、マリノはオープンカーに乗って銀座から新橋をパレードしている。チャンピオンをひと目見ようと沿道には何万人もの人々が集まった。当時はそれほど「世界チャンピオン」の価値が高かったのだ。

ノンフィクションライターの山本茂は著書『カーン博士の肖像』で、一ノ瀬の豪

放な性格を示す興味深いエピソードを書き残している。来日した一ノ瀬はクラブで日本人記者と飲み、そこで堂々と軍歌を歌ったのだ。当時、軍歌はGHQに禁止されていたから、記者たちはうるたえた。そんな記者たちを見て、一ノ瀬は「君たちはそれでも日本人か！」と怒鳴り、そして大きな声で「誰か故郷を想わざる」を歌った。この歌こそ、ハワイにいた日系人の愛唱歌だった。一ノ瀬は泣きながら歌った。周囲にいた記者たちもまた泣きながら歌った。その夜の最後は全員で軍歌を大合唱したという。

五月にマリノ対白井のノンタイトル十回戦が後楽園球場で二万五千人の観客を集めて行われた。評論家も観客も白井が勝つとは誰も思っていなかった。大方の予想は白井が何ラウンド持つかというものだった。当の白井自身が勝てるとは思っていなかった。勝てると思っていたのはカーン博士だけだった。

ゴングが鳴ると白井は素晴らしいスピードでマリノと堂々と渡り合った。戦前の予想を覆し、最終ラウンドまで打ちあった。判定は二―一でマリノだったが、白井自身は「勝った」と思った。

負けはしたが、世界チャンピオンとほぼ互角に戦えたことで、白井は大きな自信を得た。同時に師匠であるカーンに対して更に信頼感を増した。

この試合の後、一ノ瀬はNBA（全米ボクシング協会）に「白井は世界に通用す

るボクサーである。ランキングに入れられたし」という手紙を書いている。七ヶ月後、今度は白井がハワイに渡り、再びマリノとグローブを合わせた。これもノンタイトル十回戦である。この試合で認められれば、世界挑戦も夢ではなくなる。

十二月にホノルルで行われたこの試合は、後に白井が「生涯最高の試合だった」と述懐したほどの素晴らしいものとなった。白井はスピードでマリノを圧倒し、目の覚めるような素晴らしいパンチをびびりし決め、六ラウンドにマリノを三度ダウンさせた。そして次の七ラウンドに更に二度のダウンを奪ったところで、一ノ瀬がタオルを投げた。セコンドがタオルをリングに投げ入れると、そのボクサーは試合放棄と見做され、自動的にTKO（テクニカル・ノックアウト）負けとなる。

ノンタイトル戦とはいえ、日本人ボクサーが現役の世界チャンピオンをTKOで破ったことは、当時の日本人にとって大ニュースだった。

しかしノンタイトル戦で勝っても世界チャンピオンにはなれない。チャンピオンになるためにはタイトルを懸けた試合で勝たなくてはならない。そこには大きな壁があった。当時の日本では外貨を国外に持ち出すには制限があり、しかも世界チャンピオンの莫大なファイトマネーを用意できるプロモーターは国内にはいなかった。

それを可能にしたのは、またしてもサム一ノ瀬だった。彼はマリノの王座がもう長くないのはわかっていた。当時マリノは三十五歳、ボクサーとしては既にピークを過ぎていた彼に、世界中から多くの挑戦者が名乗りを上げていた。誰が挑戦者としてやって来ても、老いた王者がタイトルを奪われる可能性は高かった。

一ノ瀬は、どうせタイトルを失うなら、そのチャンスを日本人にやろうと考えた。もしフライ級のタイトルがヨーロッパに渡れば、もう日本人にチャンスはめぐってこない。当時の有色人種に対する差別は大きかった。現にマリノが奪うまでフライ級のタイトルは二十年以上ヨーロッパとアメリカでたらい回しにされてきたのだ。

一ノ瀬は白井のためにチャンピオンのファイトマネーを自分で用意した。もちろんボクシングは慈善興行ではない。一ノ瀬はその試合の興行権を得て、更にもし白井が勝てば、その後の白井の試合の興行権を手に入れるという条件をつけた。

この時、マリノに支払われたファイトマネーは二万五千ドル（日本円にして九百万円だが、当時の一ドル三百六十円の固定レートは正しい相場をあらわしておらず、実質は一千万円をはるかに超える価値があった）と飛行機代および滞在費三百万円というものだった。当時、総理大臣の月給が十一万円だったから、いかにその額がすごいかわかるだろう。対する白井のファイトマネーは四十万円。しかしカーンは「チャ

ンスがファイトマネーだ」と言った。

こうして昭和二十七年（一九五二）五月十九日、後樂園球場で日本初の世界タイトルマッチが行われた。後に白井に次いで日本人として二人目の世界チャンピオンとなる原田は九歳、この試合についての記憶はない。

*

*

*

この試合の前夜、カーンは白井に言った。

「日本は戦争でアメリカに負けた。今、日本が世界に対抗できるのはスポーツしかない。ヨシオ、君は自分のために戦うと思っではいけない。それだけでは苦境を乗り越えられない」

この試合が行われる三週間前の四月二十八日、サンフランシスコ講和条約が発効し、これにより日本は六年にも及ぶ外国軍隊の占領から解放され、国家としての主権が回復された。多くの日本人にとって、この試合は国際社会への復帰の夢を重ねた大事な試合となった。その思いは、今日のサッカーのワールドカップや野球のWBCなどの代表チームに寄せるものとは、まったく次元の違う重みを持っていた。

カーンは最後にこう言った。

「ヨシオ、君はこの試合に勝利することで、敗戦で失われた日本人の自信と気力を呼び戻すのだ」